

# 公共事業と教育-学びの場から考える-

## No. 2



学びの場から考える  
国士学アナリスト 森田 康夫

●●2

実在人物の業績や生き方を素材とする「伝記」は、子どもの読書の好みに合うジャンルです。このため、戦前は「修身」、戦後は小中学校の国語科で、伝記は生徒に生き方の一つの規範を示す役割を果たしてきました。

1970年代までの小学校国語教科書では、福沢諭吉、エジソン、キュリー夫人、野口英世などが採録され、典型的な人物像を示していました。伝記は、文明国家の建設を志向することにも、近代社会の実現を肯定的にとらえ、それへの寄与を重要視していました。また、勉学、努力、利他的精神を強調してました。

しかし、1980年代以降は、伝記の採録数は極端に減少していききました。

次の文章は、1854年の安政南海地震津波の出来事をもとにした『稲むらの火』の前半部で、地震後の津波への警戒と早期避難の重要性、人命救助のための犠牲的精神の発揮を説いています。この物語は、小泉八雲の「A Living God (生き神様)」を翻訳・再話したもので、1937年から約10年間、国定国語教科書に採録され、戦後の検定教科書でも1960年まで用いられていました。

「これは、ただいまではない『とつぎやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地しんは、別にはげしいといつほどのものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、年取った五兵衛にも、今まで経験した

### 国語(伝記)で学ぶ公共と防災『稲むらの火』と『百年後のふるさとを守る』

ことのないような気味悪くであった。

(中略)

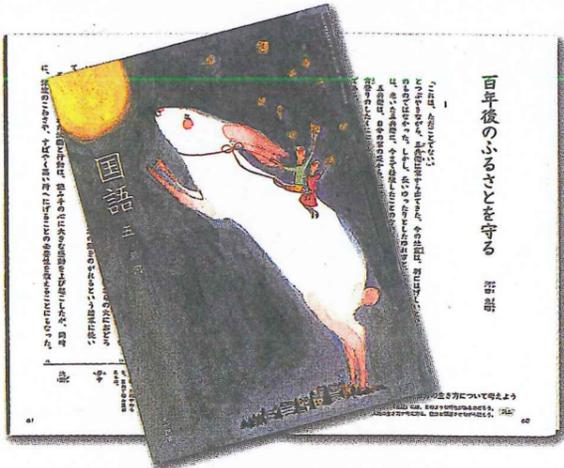
五兵衛は、村から海へ目を移した。そして、そこにすいっけられてしまった。風とは反対に、波がおきへおきへと動いて、広いすな原や黒い岩底が、見る見るうちに現れてきた。『たいへんだ。つなみがやって来るにちがいない』と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百人の命が、村といっしょにひとのみにされてしまう。もうこくもゆだんはできない。

『そうだ、……よし』と、さげんで家にかけてこんだ五兵衛は、大きなたいまつを持って、飛びだして来た。そこには、取り入れるばかりになっている、たくさんいたばが積んである。『もったいないが、これで村じゅうの命がすぐえるのだ』。五兵衛はいきなり、そのいなむらの一つに火をつけた。風におおられて、火の手がぱつと上がった。一つ、また一つ、五兵衛はむちゅうで走った。(後略) 11年4月実施の新学習指導要領では、小学5・6年生の読むことの言語活動として「伝記を読み、自分の生き方について考えること」が明示され、国語科教材として再び伝記が重要視されるようになりました。

小学5年生用教科書「国語 五 銀河」では、「百年後のふるさとを守る」というタイトルで、防災学者の河田恵昭先生が執筆した浜口儀兵衛(「稲むらの火」のモデル)の伝記が掲載されています。

「稲むらの火」には描かれていませんが、儀兵衛の偉業は災害に際して村民の迅速な避難に貢献したことだけではなく、被災後も将来再び同様の災害が起こることを危惧し、私財を投じて防潮堤を築造した点にもありました。これにより広川町の中心部は、昭和の東南海地震・南海地震による津波に際して被害を免れたのです。

「地震の多いこの国に生きるわたしたちは、儀兵衛がしたことや考えたことから、多くのことを学ぶことができる。また、学ばなければならぬだろう。今も広川町では、小中学生による堤防の手入れが続けられている。夏休みも終わりがけの暑い日、子どもたちは儀兵衛に感謝し、ふるさとの安全を願って、一心に草取りにあせを流す」で結ばれる『百年後のふるさとを守る』には、国土教育・インフラ教育の可能性が詰まっています。



百年後のふるさとを守る

『百年後のふるさとを守る』(河田恵昭著) 国語 五 銀河『(毎週火曜日掲載)